

パリの春夏秋冬

(原 研) 中 島 豊

1985年11月から1988年末まで3年1カ月余り経済協力開発機構原子力機関(OECD NEA)のData Bankに職員として勤務今年早々に帰国致しました。その間の日常生活の様子を書いてみたいと思います。

OECDの事務局はパリ16区を中心にほとんどがパリ市内にありますが、Data Bankだけは大型計算機を使用する関係からフランス原子力庁(CEA)の研究所の1つCEN-Saclayの構内にあります。パリ市からは約20kmのところであり自動車専用道路が通じております。朝夕の通勤時間帯を除けば自動車で20~30分で行くことができます。CEN-Saclayには5,000人位の人達が働いていると云われており、かなりなhigh fluxの研究炉もある大きな原子力研究所です。また車で5分位のOrsayにはパリ大学の理学部や国立や私企業の研究所もいくつかあり、Saclayの台地は今やフランスのハイテクの中心の一つとなりつつあり、筑波研究学園都市のフランス版だと云う人もいます。とは云うもののCEN-Saclayを含めて他の機関とData Bankとの交流はほとんどなく、個人ベースでの接触がわずかにあるのみです。CEN-Saclayは畑とゴルフ場に囲まれ広大なSaclay台地の自然の豊かな環境にあり、四季折々の風物を楽しむことができます。フランスの春はマロニエの白い花と共に訪れます。寒くて暗い陰うつな冬からの解放を象徴する花です。北国(パリは北緯49度に位置しています。)の例にもれず、マロニエに限らず、すもも、リラ、桜など春の花が一斉に咲き乱れます。畑一面の菜の花も日本と比べてスケールが大きいただけ印象深い思い出となっています。なだらかな丘陵地一面に実る麦はゴッホの絵を目のあたりにする思いです。

パリの夏は比較的短かく暑いのは6月と7月です。8月に入るともう秋風が吹くといった感じですが。暑いといっても高級ホテルや高級レストランを除いてオフィスやアパートはほとんど冷房がない位です。だからたかが知れたものです。湿度が低く空気が乾燥しているせいもあるでしょう。よく知られている様にかなりの人達(生活にゆとりのある人達だけの様ですが)は夏になるとバカンスに出掛けます。その間はパリの人口が半減した感じがします。何時もは混雑しているパリ市内も、快適に車で走ることが出来ますし、駐車する場所も容易に見つけることが出来ます。パリの夏は涼しくて、人が少ないものですから、私などはバカンスに遠くに出掛けないでパリで避暑をするのが一番良いと思っております。でも皆が出掛けると家族の者にせかされて人並にバカンスに出掛けることとなります。バカンスに出掛けると云ってもフランス人と日本人は観光地をできるだけたくさん一生懸命に見て回り、疲れ果ててバカンスから帰って来ることとなります。またそのための交通費、ホテル代などはバカになりません。私どもは食費

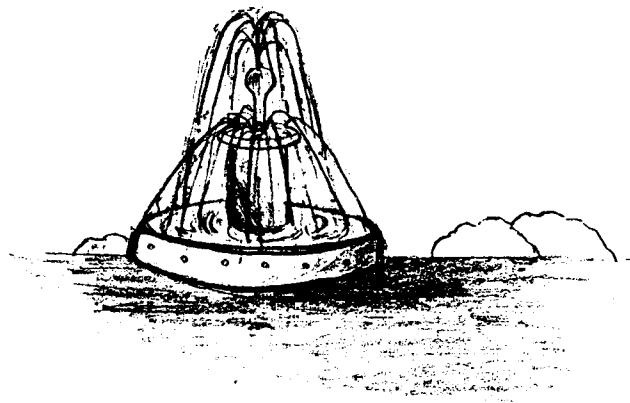
をいくらかでも減らすのと日本食を食べたいのとで車に電気釜と米を必ず積んで出掛けることにしていました。一度米を忘れて出掛け現地（スイス）で米を調達したところ、パサパサした御飯で食べられなかったことがありました。フランス人は安くバカンスを過すのが上手です。かなりの割合のフランス人が先祖伝来の別荘を持っており、バカンスで余分にかかる費用はせいぜいそこへ行くためのガソリン代位です。フランス人にとって南仏で一カ月もテント生活することは、別にそんなに悪いバカンスの過し方ではない様です。本を読んだり、子供と自然の中で遊んだり、近くの名所旧跡に見物に出掛けたりして過します。もう少し上等の部類だと、過ぎめの家具付きアパートを借りて、食事は自分達で作ります。このやり方ですと、長期滞在で割安なるのと、食事代は自宅にいる時と同じ程度しか掛かりませんから、かなり安く上げることが出来ます。安くて良いアパートは夏の場合ならイースター前に予約しないと一杯になるという話です。もちろんお金持ちは高級ホテルに滞在することでしょう。ヨーロッパ一般と比較して、日本人は遊び方が下手だと思いました。遊びにもある程度エネルギーを割かないと、楽しく遊べないのではないかと思います。

フランスの秋は日本よりかなり早く来ます。恐らく一カ月位は早いのではないかと思います。日本と同様に木々は紅葉をしますが、フランスを含めてヨーロッパでは大体が黄色か褐色であり美しくありません。どうしたわけか昨秋（1988年）の紅葉はずばらしく、あちこちで真黄色に紅葉した木を見かけました。春に美しい花を咲かせたマロニエは秋に果実を実らせませす。かなり大粒の実で公園などマロニエの大木から大きな音をたてて落果するのを見ていると、その木の下に行くのは身の危険を感じないわけにはいきません。褐色の果実は、栗に大変良く似ていますが、残念ながら食べられません。パリに住む日本人の間では、煮ても焼いても食べられないものの一つに教えられています。その栗の方は野性の木がかなり生育しており道端に落果しているの見掛けますが、フランス人はあまり拾わない様で、日本人でたくさん拾って来たと言っていた人がいました。かと云ってフランス人が栗を食べないわけではありません。寒くなって来ますとシャンゼリゼやルーブル美術館の脇に焼き栗屋が出ていて良く買って食べました。パリ日本人学校の遠足は春はフォンテンブローの森、秋はムードンの森と毎年決っております。フォンテンブローの森では春わらびが採れ、ムードンの森では秋栗が拾えるからでしょうか。しかしながら我が家の息子は3年間一度もわらびも栗も持って帰りませんでした。栗を数個は拾った様ですが、粒が小さいのと数が少ないので捨ててしまったと云っております。

パリの秋は足早に通ります。秋の彼岸を過ぎるとどんどん日が短くなって行きます。11月中旬になるともうみぞれがちらつきはじめますが、もちろん年内に雪が積ることはありません。12月に入るとパリのめぬき通りシャンゼリゼに電球の飾りつけにあかりがつき一段と華やかになります。規模の大小の差はありますが各自治体（コミュン）のめぬき通りにも電球の飾りがとりつけられますが、なんと云っても圧巻はシャンゼリゼのものです。こうした華や

かな飾りつけを見ると、クリスマスは北国に住む人達が陰うつで長い冬を楽しく過すために生活の知恵として考え出したものであることが実感として伝って来ます。フランス人のクリスマスは既して静かで、親類縁者が集って一夜を過すのが習慣の様です。これはつい最近までの日本の正月の風習と良く似ています。またクリスマスイブにはあちこちで花火が打ち上げられ、その音が伝って来ます。これも除夜の鐘の音があちこちの寺院から聞えて来るのに似ています。大晦日は逆に外にくり出します。シャンゼリゼ通りは歩行者天国となり人で一杯になります。カンシャク玉のはじける音と人々の歓声で満ちあふれます。こうして一年が暮れ新しい年が明けることになります。しかしパリの人は万物が生き返ると云われるイースターまでの長い冬を耐え忍ばなくてはなりません。パリの冬は毎日雲が低くたれ込めて、太陽が顔を出すことはめったにありません。一日に何度か時雨がやって来ます。日本と同様通常は西の方から気象が移って来ますのでフランス人は、「悪い空気をイギリス人が送ってよこす。」と云っています。パリは東京よりずっと北に位置しておりますが、北太平洋海流（暖流）のため東京よりわずかに寒い程度です。積雪も東京と同程度で年に2～3回積る位です。1987年2月にはパリは30年ぶりの大雪とかで30cm位積雪がありました。この時は車の通行が困難となり、事故や通行不能などが続出した様です。これなども雪に不慣れなパリジアン象徴でしょう。又逆に昨冬は暖冬で積雪は全くなかったそうです。パリのアパートは集中暖房と給湯設備がありますので日本の「ウサギ小屋」と比べたら大変住み良く出来ております。私などは冬でも半袖の下着を着て過しておりましたが、正月に日本に帰って来てからは長袖の下着を着ましたが、それでも寒い位でした。自然条件が悪い分だけ設備を良くして快適に暮せる様にしているのだと思います。こうしてパリの人は冬を過し、イースターにはまた1～2週間のバカンスに出掛けます。

フランス人は遊び上手ですし、フランスでは遊んでも文句を云われません。ルイビトンのバッグやエルメスのスカーフだけでなく遊び方の知恵も輸入したらどうでしょうか。





よく昼食を食べに行ったサクレ台地を下ったジフの町
はずれにある谷間の小さなレストラン「タンタン」で